

思いつくままに

宮澤辰雄（生物化学教室）

理学部を意識したのはいつ頃であったか、と考えているうちに、それからそれへと遡って、高校2年のとき勤労働員で、大型トラックを運転していたことを思いおこしました。その頃は、開成学校工科（工学部の前身）に学んだ祖父の影響で、航空学科に進むつもりでしたが、暑い夏の日に戦争は終わりました。翌年の春にテニス部が復活してからの半年は、毎日もうれつな練習でした。10月の全国高等学校大会（東日本地区）で、決勝まで進んだのは若き日のよい想いです。その後、大学受験に気持ちを切りかえ、依然として工学部を志望していましたが、先輩・級友よりの勧めで理学部化学科に替えました。前期（1年生）の学生実験の合間（？）に、母校にコーチに行ったりしましたが、秋に、後輩とのシングルの練習試合に負け、ようやく化学に専念する気になりました。

水島三一郎先生の研究室で、直接には島内助教よりご指導を受けました（島内先生については理学部広報8巻7号）。「学生の指導のしかた」まで教わっていたのに気がついたのは、かなり後のことです。昭和30年に化学科助手に採用され、物理化学学生実験の何項目かを分担する他は、研究に専念できるという恵まれた状況でした。タンパク質の赤外吸収の研究で、まとまった成果を得ら

れたのは、舶来の重水（当時は超貴重品）と自記式赤外分光光度計（輸入第1号機）をかなり自由に使わせて頂いたおかげであります。

そのうち米国へ留学ということになり、急いで学位論文をまとめ、急いでお見合いをし（翌日プロポーズ）、新婚の妻とともにやっと一息ついたのは、横浜で氷川丸に乗船したときでした。3年間の留学のあと、大阪大学蛋白質研究所に赴任しました。振動分光学的研究グループを担当し、この分野ではわが国で最高の機器を整備し、30才台の若いときに、意欲のある大学院学生と共に研究に専念でき、たいへん恵まれていました。

大阪で万国博覧会のあった年の暮に、とつぜん、久保先生（当時理学部長）よりの連絡で、生物化学科に移る話が始まりました。結局、併任で生体物質化学講座の担当をお引受けしたのは、理学部がやはり私の母校であったからです。

理学部に戻ってきて驚いたのは、共同利用研究所とのあまりもの格差でした。併任していて、直接に比較しやすかったのであります。それでも、昭和49年より生物化学科に専念することを決心しました。まもなく51年には、久保先生と植村理学部長の格別のご配慮で、わが国では初めて、パルスフーリエ変換の超伝導核磁気共鳴測定装置が、

生物化学科に設置されました。その設備費の申請に、田隅助教授（まもなく化学科へ栄転）の果たされた役割は忘れ得ないものであります。

なにせ、輸入第1号の高性能装置でしたので、学内はいうに及ばず、ひろく全国の国立大学研究者の要望にも応えて依頼測定をしました。私も、この装置のオペレーション（と液体ヘリウムの補給など）をしましたが、ジクロロベンゼンで分解能0.05ヘルツのチャンピオンデータを得たことなどは、楽しい思い出であります。

そのうちに、化学科から迎えた荒田助教授の免疫グループ、東島博士のペプチドグループ、横山博士の核酸グループの構成になり、研究室内で野球のリーグ戦ができる人数になっていました。一昨年には大異動があって、荒田助教授は薬学部、東島博士はテキサス大学に栄転しました。それ以前より、核酸グループでは、タンパク質の生合成（とくに遺伝情報の翻訳）システムの動的構造と機能制御についての研究に取り組み、3年間の研究プロジェクトの申請が、特別推進研究として幸

に採択されていきました。定年を控えた私が、最高に幸せな数年間を送ることができたのは、研究費に恵まれていたとはいえ、やはり、横山博士と意欲的な十数名の学部・大学院学生が次々により研究成果をあげるのを見ていたからであります。

さて、私はクルマの運転とテニスには多少の自信があります。生物化学教室への置き土産として優勝カップを用意しましたが、昨年秋のテニス大会の後で、そのカップは私の手許に戻りました。やはり、若いときに「からだで覚えた」ことは、還暦を迎えたいまでも根づいているように思えます。実は、ここで強調したいのは、よい環境での若いときの学問の修練が、研究者にとっていかに重要であるかということであります。その点で、共同利用研究所と学部との研究設備や研究費の格差が、むしろ拡大する傾向をみせていることは、憂慮にたえません。この際、理学部に学ぶ後輩の大学院学生のために、制度としても大学院を抜本的に改善する方向で、理学部の先生がたに、いま一層のご尽力をお願いしたいと思います。